



校長室だより～湘南の空～

第 20 号

令和 5 年 4 月 14 日

101 回生を迎えた湘南は新しい時代の息吹に満ちている。

「基礎力とは何か。」教科書を自在に活用できる力、生涯学び続けられる力。教科書を自在に活用できれば、生涯学び続けられる力につながるし、様々な問題を考え抜くことができる。生徒の皆さんには基礎力を自分の感覚・頭でつかみとってほしい。これは皆さんが社会にインパクトを与える土台になるに違いない。

高校生の高校生による高校生のためのジャグリング大会

令和 5 年 3 月 21 日（火）、第 13 回日本高校生ジャグリング大会がひらしん平塚文化芸術大ホールで開催された。私は全国大会の名にふさわしい高いレベルの演技に釘付けになった。

同大会は、本校ジャグリング部が同好会から格上げする形で発足した平成 22 年度、当時の諏訪康貴部長（87 回）を中心に、高校生ジャグラーの交流を深め、技術を競い合うことを目的に計画立案された。プロも出場する国内大会はいくつかあるものの、高校生対象の全国大会がなかったためだった。部員たちはジャグリング部がある全国の高校を調べ上げ、案内状を送付。大会費用を賄うため、ジャグリング用品店から協賛も取り付けて、湘南高校で第 1 回大会を開催した。

審査員長の中嶋潤一郎氏は閉会式で「まさに、高校生の高校生による高校生のためのジャグリング大会。私は、朝からこの会場で高校生としか会話していません。本当に素晴らしいこと。」と実行委員会を称えた。

こうした夢の舞台を自分たちの手で作り上げる生徒の皆さんの実行力に敬意を表したい。

部活動の輝き

3 月 27 日（月）、合唱部の定期演奏会は「様々な方への感謝の形となり、そして苦難を克服した新たな活動への契機となる」ものであり、音楽への思いに裏打ちされていた。岩本達明氏の顧問としての最後のステージであり、これからも音楽で未来を照らそうという出演者の意気込みが伝わってきた。

4 月 9 日（日）、吹奏楽部の定期演奏会は「音楽の力、吹奏楽の楽しさ、皆様の前に立てることのありがたさに改めて気づかされる」1 年間の集大成に相応しいものだった。「楽しさを伝える」ステージは客席に笑顔をとくさん咲かせていた。4 年ぶりとなる OB・OG ステージも圧巻だ。この演奏会には公式戦で激熱の逆転劇を演じたばかりの野球部の選手も駆けつけていた。

これらの部活動に限らず、運動部・文化部ともに湘南らしさがあふれてきたといった印象だ。目先の結果にとらわれず、未来の社会や応援してくださる人たちの笑顔を想像して突き進んでいただきたいと思います。

自分が必要としているものは、ほかの人も同じように必要としている

令和5年1月16日、産婦人科医・遠見才希子さん（78回）が1年生対象進路講演会で講師を務めた。遠見さんは、トレードマークのお団子ヘアと「えんみちゃん」のニックネームで、全国の中高生に向けて性教育の講演会を行っている。

○ 1年生の最初のテストはクラスで最下位。授業中やることといえば寝るか、携帯をいじるか。「文武両道」を理念に掲げる憧れの高校に入学したのに、やりたいことが見つからない。居場所のなさや寂しさをずっと感じていた。当時の口癖は「だるい」。

○ 他校の友達が「チアをやっているんだ」と写真を見せてくれて、すごく楽しそうだった。「うらやましいなあ」と言ったら「ないなら、つくってみれば？」と。そうか！とチラシを作って学校内でメンバーを募集したら8人集まった。3年生のときには30人以上に増えて、学校にも正式に認めてもらい、現在創部23年目。結局、私は自分の居場所がほしかったんだと思う。同時に「自分が必要としているものは、ほかの人も同じように必要としているのかもしれない」と気づいた。

○ 高3の冬、授業をサボってばかりいたので、出席日数が足りなくて、初めてじっくり教室で机に向かう時間を持ち「自分は何になりたいのか」を考えた。そのとき自分が病院を受診したときに「イヤだな」と思った経験や気持ちを思い出し、若者に寄り添えるような医者になりたい。そう考えて医学部を目指すことにした。

○ 浪人中は仲間と頑張り、聖マリアンナ医科大に合格。大学入学後に、たまたまNGOのイベントに参加し、性感染症について話し合う機会があった。それまで性に関することは「隠さなきゃいけないもの」というイメージがあったけれど、健康や幸せに関わる大切なものだと感じた。思春期のころに、もっと気軽に楽しく性を考える場があれば、心や体の変化も肯定的に受け止められたかもしれない。

○ そこから性教育の活動を始めた。17年間で訪れた学校は約1000校。このように母校に呼んでもらえ「あんなに劣等生だった自分が……」と、感極まるものがある。

○ 自分の体は自分のもので、自分の体のことを自分で決める権利がある。性と生殖に関する健康と権利を尊重するためには、正しい知識を得られるだけでなく、いろいろな選択肢を提示できる社会環境が必要。そして、どんなときも「ここに味方がいるよ」と受け止めてくれる存在が大切。

「イヤだな」と思った経験や気持ちを思い出し、若者に寄り添えるような医者になった遠見さん。「自分が必要としているものは、ほかの人も同じように必要としているのかもしれない」ということは、多くの分野に当てはまるのではないか。疑問や不満を放置せず、解決に向けて自ら動いてみることは、共感の輪を広げ、未来を切り拓く力につながるに違いない。